国勢調査の利用のしかた

茨城大学名誉教授
常磐学園短期大学教授　堀口友一

国勢調査をどのように利用するかについては，二つの面が考えられる。一つは地域の方々の理解を深めるためのＰＲや教育への利用，学術研究の利用等であり，他の面は統計の結果から導きだされたいろいろな問題に対して，国家あるいは地方行政より対策を講ずることである。しかし，いずれの場合でも，数字の表示だけでは理解に困難を伴うため，統計の図式化によって，その理解に訴えることが必要である。この場合，今回の国勢調査結果の統計のみを利用する方法は，いわば静態的方法で，今回の統計と過去の国勢調査の統計とを比較することによって，変化発展の様相を把握するのは動態的方法である。

今回実施される国勢調査を利用して作成される図式で予想されるものは，年令階級別人口構造図，出生月別人口図，国籍別人口図，従業地・通学地分布図，産業別人口図，職業別人口図，世帯種類別図，世帯人員別図，住居種類別図，居住室数別図，居住室畳数別図，人口分布図，人口密度図等があげられる。これらを描図する場合，縦または横の棒グラフ，円形比例分割図，方形比例分割図等が一般に用いられている。たとえば年令階級別人口構造図は，横棒グラフで，横に人口，縦に年令を配し，左が男，右が女となっている。また産業別，職業別人口等は円形または方形分割図（面積図である）とし，産業，職業を比率で示すのが一般的である。人口分布図，人口密度図は，他地域との関係を示す。分布図については実数を示す場合は点図，円図，球図が用いられ，円は面積，球は体積によって，人口を示す。分布の地域差が大きい場合には，点図と球図を併用する方法が便利で，最近西ドイツの地図に利用されている。人口分布や密度を階級別に示す場合が一般に多いが，市町村別に扱う方法は理解には容易であるが，図としては素朴である。でき得る限り１平方キロの方眼をかけるとより合理的になる。また階級区分の方法は一般に500，1,000，1,500のような区分がなされている。このような方法でも間違ってはいないが，学術的な立場から厳密にいえば，まず全体の分布度をみて，その状態から推計学の棄却限界の公式によって算出する方法がより適切である。

今回の国勢調査と従前の国勢調査を用いて，比較した図式を作製すると，その地域の変化発展の動態を把握することができる。一般に用いられているように，第１回から今回までの人口を折れ線グラフに示せば，その地域の人口の推移を知ることができる。性別，産業別，世帯人員別，居住室別，畳別等の諸統計は戦前と戦後で変わっていると考えられ，とくに高度経済成長の影響が，その市町村にどのような結果を与えているか等の問題は，それぞれの該当年度の国勢調査を利用し比較して，図式化すれば明らかにされるであろう。ここで重要なことは，これらの図式によって示された結果についての解釈ないしは理由を幅広く究明することである。

なお形式的なことであるが，階級別描図の場合，同一色では高度のものから濃淡，密疎に示し，色彩別に示す場合はスウエーデンで早くから採用されているプリズムの変化の順に高度のものから赤より順に配色すると，図が優雅になる。各市町村におかれても，国勢調査のよりよき利用を期待してやまない。